

# 「ドラマケーション」で表現力育む

## ●演技の基礎訓練で開発した対人教育

文部科学省の委託事業で、演技の基礎訓練を基に開発した対人教育「ドラマケーション」が、栃木県岩舟町立岩舟中学校で実施された。体を使った表現でコミュニケーションを図るシンプルな内容。その現場を報告する。

ドラマケーションは「ドラマ」と「コミュニケーション」・「エデュケーション」の複合語だ。放送業専門学校の学校法人「東放学園」が2005年、役者が演技に入る前に互いの関係を円滑にする目的で行う基礎訓練を基に開発。楽しみながら意識せず相手との関係を築く体験型の教育で、受講者が人前で自由に表現できるようにすることが狙いだ。現在は同省の委託事業として、同学園の子会社「ドラマケーション普及センター」の講師ら約20人が中心となり全国の学校で出張講座を行う。

### 手裏剣でのせる

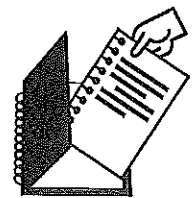
「チャリン」——。同校1年1組の総合学習の時間、大きな声が教室に響いた。同時に声の主の講師小川新次さんが、片足を前に出し、さっと身をかがめた。床の方向に投げ出した手のひらから転がった——とされるのは、2枚の見えない手



講師(中央右)と「ドラマケーション」する生徒。

裏剣だ。生徒たちは3人1組になり、その無色透明な手裏剣を拾い、投げ、受け取らなければならぬ。「困った」という表情があちこちに浮かび、辺りがぎごちない雰囲気包まれた。1人が相手に無言で投げたが、相手は気付かず立ったまま。その時、小川さんが驚いた表情で叫んだ。「あつ。今、君刺さってるよー」。途端に生徒の間から笑い声が漏れ、空気が和らいだ。その後も小川さんは「投げるとき、声出して」

「横に投げたら刺さっちゃう。受け取れない」などと生徒に声を掛け、そつと後押しし続けた。初めは恥ずかしがって、手放すようにしか投げることができなかつた子も、少しずつ大きく、きちんと相手の



目を見て飛ばせるようになるから不思議だ。教室ドア付近にはその様子を一目見ようとする教員が何人か集まった。「のせるのがうまいなあ」と、つぶやいたのは池田哲夫教頭だ。

同校は昨年度から、さまざまな授業にグループ活動を積極的に採り入れる方針を掲げている。共同作業や発表の場を通じて、生徒の表現力を高め学級内の人間関係を良好にするとともに、学力の向上を図るのが狙いだ。実際に活動の様子を見て、池田教頭は「プログラムは教員でも可能。でも、教員だと指導になる。外部講師だと子供が自発的にやる」と、違いを説明する。

普及センターによると、ドラマケーションは互いの距離感を縮めるため、遊び感覚で行い「心と体を解放させる」のがポイントだという。そのため、内気な子には決して無理強いをしない。逆に、積極的な子は活動に取り込み、全体の雰囲気盛り上げる。生徒が関心を持つ活動を探りながら進めるため、大切なのは「待つ姿勢。長い目で見て変わってくれればいい」というのが、指導の極意だ。

普及センターはドラマケーション無料体験講座のほか、「学校の先生も覚えてほしい」と、教員対象の講師養成講座などを開催し、普及に力を入れている。東日本大震災で被災した宮城、福島、岩手の東北3県の学校などについては、ボランティアでの実施も受け付け中。問い合わせはドラマケーション普及センター、電話03(53326)7033まで。

(阪井香織 宇都宮支局)